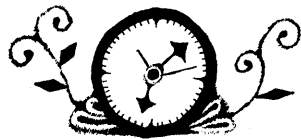


# 子ども時代と私

水野 悌一



私は自分の子ども時代について、ここに記すことになったが、その前に少し私の考えを述べておこうと思う。ここに述べる事柄は自分史であると同時に、一九三五～一九四五年の地方都市の中流生活家庭の状態をなるべく正確に記述したものでありたいと思う。最近の我が国では、情報が満ちあふれかなり均一化した生活が見られるようになったが、一九四〇年代には東京

と地方都市の生活状態にかなり大きな差異が認められた。従って、正確な状況はもはや私の記憶からも遠ざかりつつあるが、感情をなるべく交えないで記述することは、あるいは将来何らか役に立つかもしれない。

私は、一九三五年名古屋市中小さな工業製品の製造業者の長男（姉が一人の二人姉弟）として生まれた。小学校三年生まで育った所は東京で言うならば一九七

○年頃までの田園調布のような所かもしれない。英、独、仏、伊の公使官員や貿易商社員の住宅が多く、祭日には母国旗と日本国旗を交差して立てられているのが美しかったことを覚えている。

出生時体重三五〇グラムで当時としては巨大児に近く仮死状態で生まれた。いわゆる虚弱児として小学生のうちには死ぬと思われていた。姉は幼稚園に入ったが、私は病弱のため幼稚園には行けなかった。一年の



大半を寝て過ごしたため、極めて気難しい、意気地の無い、話さない、人見知りの強い子どもであった。

た。当然友人は全くできず、絵本、積み木、機械類の玩具（ゼンマイじかけの機関車・装甲自動車・消防自動車・犬など）、白熊の縫いぐるみ、三輪車、小さな滑り台、二人乗りのブランコなどが一人遊びの道具であった。姉は八歳

年上で遊び相手にはならず、砂遊びや水遊びはほとんどの場合、中耳炎や扁桃炎を誘発するため禁止されていた。その頃、熱中した遊びは箱庭遊びだったように思う。マッチ箱大の家、神社、鳥居、松の木、鉄橋、汽車、豆粒大の人物、蛙、鯉、亀などが素焼きと針金で作られ、お菓子の空き箱に入った少量の砂場にそれらをおくという、現在の箱庭療法を偶然にも毎日行っていたことになる。一年間に十回以上襲った化膿性中耳炎と手術、数十回以上の化膿性扁桃炎、消化不良性大腸炎などによる高熱、痛み、嘔吐、下痢には参っていた。

近所の公立小学校に特殊学級ができた頃であったと思われるが、学期直前の健康診断では問題なく特殊学級に入れられた。小学校に通い始めて驚いたのは、自分の目には奇異に見える多くの同僚の存在であった。何時もよだれを流している子ども、発語障害や言語理解不能の子ども、背骨の曲がった子ども、極端に身長足りない子どもなど、実に様々の子どもが

いて、皆仲良くやっていた。一学年で健常児クラス約百五十人、特殊学級四十人位だったと思われる。特殊学級の授業は退屈だった。片仮名、平仮名、漢字、作文、加減算くらいで時計の読み方は自分の欠席の時期に習ったと見えて母親から教えられた。体育の授業は

運動場での自由遊びやおしくらまんじゅう、あるいは鬼ごっこ程度であったように思う。二年生から特殊学級はなくなり、普通学級に編入された。理由はいまだに不明だが、担任の教師から全員に対して、学校の名称、全生徒数、校歌を暗唱させられたのには面食らった。何しろやっと、学校の名称、自分の両親と自分の姓名しか言えず、自分の住所や校歌は知らなかった。

しかし、現在のような「いじめ」はなかった。ただし後年、薬科大学卒業後まで友人となった麻疹脳炎後遺症の発語障害とよだれのため精神遅滞児に見えた男はかなりいじめられた。体育は徒手体操、棒のぼり、ドッジ・ボール程度で、放課時の遊びは女子のまりつき、縄跳び、ゴム跳び、男子の一種の鬼ごっこ、馬跳

び、縄跳び位であった。しかし、同年代の子どもに出会った驚きと恐れ、言葉遣いを知らないための先輩からのいじめ・同級生からのそしりのため、いつも学校は恐怖と苦痛の場となっていた。

自宅の近所に学齡児はいなかったが、唯一の同性の同級生がいた。彼の両親は共稼ぎで、昼間は全盲の祖母と妹がいた。三年生の十二月まで自宅の裏山でたった二人で戦争ごっこばかりして遊んだ。敵味方はなく、日本軍同士で戦った。当時の日本人の一般家庭は貧しく、学校給食は始まったばかりだったが、一割位は昼食の弁当を持ってこられなかった。そのため、昼食時に彼らは運動場の片隅にかたまって時間を過ごしていたようであった。

次第に第二次世界大戦での日本の敗色が強まり、アメリカ軍の爆撃が激しさを増し、四年生以上は四月から学童疎開が名古屋でも開始されることとなった。当時の男の子の将来になりたい人物は軍人（大将）だったが私には全くその気はなく、太って優しい小児科の主

治医のような医師になりたいと思っていた（現在では考えられないことだが、毎週一〜三回かかりつけの小児科医の往診があり、一応健康管理されていた）。

三年生の疎開開始までは、相変わらず中耳炎と扁桃炎で出席日数の最低線すれすれまで欠席し進級が危ぶまれていた。近所に多分学芸大学の付属小学校へ通う兄妹がいたが、こちらからの挨拶を全く無視され初めて差別のあることを後年悟った。いわゆる「いい子」ぶるつもりは毛頭なかったが、先生の教えをよく守り、神社の前では脱帽して戦勝を心から祈念し、坂道で人の引く重い車や馬車の後押しをしていた。しかし、敗戦が明らかとなりいわゆる神頼みの空しさを体験してからは、神社仏閣は観光の対象と化した。

当時は五月半ばまで学校を欠席し、七月から長野県志賀高原付近の温泉宿で九月中旬まで過ごし、（現在の東京地方ほど別荘をもつ習慣がなかったように思う）十二月からは欠席を繰り返しながら登校していた。避暑地では友人らしい者もなく、散歩をしたり、

虫取り網を振り回し、時々温泉プールの中を歩き回る程度で、水泳は習う機会もなく、できなかった。両親はたった一人の男の子が虚弱児であり、成人するとは考えてもいなかったため、学業は一切無視し、ただ健康に毎日が送れるならばと考えていたようであった。

学校の行事の中で一番嫌いだったのが、運動会と学芸会であった。ともに、長期欠席児童にとっては訳が分からず病気のせいもあって、たいていは欠席した。その代わり、偉人伝、国内外の神話、童話、子ども向けの小説、科学解説書、姉の影響による少女小説などはおおいに読みあさり、社会性発達の不足分を多少なりとも補った。

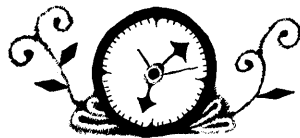
三年生十二月からは個人疎開（特別の理由のある家庭に認められたもので、個人単位の田舎への疎開。大部分は学級単位で担任教師が引率して田舎へ集団疎開した）で母親、姉、私の三人が現在名古屋市となっている農村地帯へ疎開し、自宅には父親だけが残った。疎開を機に、かなり健康となった。言葉と服装の違い

が原因と思われるが、田舎のガキ大将に石、土くれ、雪の塊、稲の切り株を投げられ、下駄で殴られてひ弱な都会の子はすぐ不登校となった。後年、ガキ大将と再会しいじめの理由を尋ねたがよく分からなかった。

アメリカの空襲が激しさを増し三月頃からさらに山奥へ逃げ、現在は岐阜県中津川市と思われる山間の小学校へ転校した。子どもの足で一時間はかかるため、毎朝七時三十分には家を出た。この小学校でも再びいじめに会い、一時不登校を起したが、次第にたくましくなり五月からは比較的元気に登校した。この時期に、名古屋の自宅は焼夷弾爆撃で焼失し、命からがら逃げ延びた父親は岐阜県の田舎の疎開地へやって来た。しかし、教員不足のためかこの小学校では、ストーブ用の薪運びと便所の人糞を畑に肥料としてまくことを初めて経験して夏休みとなり、八月には日本の敗戦となって九月には最初の疎開地の名古屋近郊の田舎の小学校へと逃げ戻った。子ども時代の健康状態を後年回顧してみると、虚弱児をさらに虚弱にした原因

は過保護にあったのかも  
しれない。それが、疎開  
によって母親のある程度  
の保護の元に解放され年  
齡的成熟も加わって健康  
を取り戻したようであ  
る。

名古屋近郊の小学校は  
約一年前と同じ状況であ  
り、健康をとりもどしか  
なりたくましくはなっ  
ていたが、全く目立たなかつた。世の中は騒然として泥  
棒、暴動などの小さな事件はあったが、父親は無職と  
なり預金も自由に引き出せない時代であったため、野  
菜、小麦、薪は自宅で生産した。人糞を畑にまくこと  
は私が父に伝授して一人得意になっていた。敗戦か  
らしばらく後の一九四六年春頃から、栄養失調のため、  
外傷がほとんど化膿し、我々男の子どもは特に悩



まされた。数年間は抗生物質も高価すぎて入手できず、わんぱく坊主共は厄介な化膿症に泣いた。一般の家庭では石鹼不足、殺虫剤不足のため蚤、虱がはびこり発疹チフスが流行したため、現在は発癌性物質として製造禁止となったDDTを無害と聞かされ、頭から散布されたり、家庭用に配布されて大量に散布したシートにくるまって眠った。



第二次大戦開始以来十年近く工業製品の製造を休んでいた父は、重い腰を上げて工場経営を再開した。昔風の手堅い企業経営では、うまく行くはずがない戦後の混乱時代であった。当時 は外地（満洲即ち中国東北部、韓国や北朝鮮、タイやフィリピンなどの日本の植民地など）からの引き上げ者などは、生きるために必死に働き多くの成功者を出していた。そんな人々に交じって律義一

本の経営方針が成功するはずはなく、経営状態はかなり苦しかったと想像される。しかし、昔気質の父は、「俺の目の黒いうちは、名古屋から離れるな」を繰り返し、極めて頑固だった。私はそこで二つのハードルを越えなければならなかった。つまり、家業を継がず、医学部に行くことと名古屋を離れることである。薬学部へ行かず医学部へ行くことは、母親が一応賛成してくれたこともあり、父の許しが出るまでに数年を要したが、名古屋を離れることだけは最後まで認められなかった。

中学校へ入ってからは一年間の欠席日数は一、二週間程度となり、とっくの昔に死んだはずの子どもは比較的元気で勉学にいそんでいた。しかし、体育の成績だけはいつも最低でありそれ以後四十年たっても、体育の授業で教師から叱られている夢を時々見る。このような子ども時代を過ごした私が、名古屋を離れ東京の住人となったのは、やはり父の死後であった。

（お茶の水女子大学）